

写真に写っているのは、キク科の一年草であるコセンダングサ（小梅檀草）の種子です。秋になると衣服や靴下、動物の毛などにしつこく付着するため、「ひっつき虫」の代表格として知られています。黒っぽく細長い種子が放射状に並び、その先端には二本から三本ほどの鋭い突起が伸びています。この独特な形は、単なる飾りではなく、種子を遠くへ運ぶための巧妙な仕組みです。

先端の突起をよく見ると、魚を突く銚（もり）の返しのように、逆向きの小さな棘が並んでいます。そのため、一度布地や動物の毛に引っかかると簡単には外れません。風に乗って飛ぶタンポポ型とは異なり、コセンダングサは人や動物を「運び屋」として利用する散布戦略を採っています。森林の縁や道ばた、河川敷などで急速に分布を広げられるのは、この優れた付着能力のおかげです。

よく似た仲間にアメリカセンダングサがありますが、両者は花や種子の形で見分けることができます。コセンダングサは黄色い筒状花だけが目立ち、白い花びらのような舌状花がほとんど見られません。一方、アメリカセンダングサは小さいながらも白い舌状花を持つことが多く、花の時期には比較的区別しやすい種類です。種子もよく似ていますが、アメリカセンダングサのほうがやや大型で、先端の芒（のぎ）が長い傾向があります。

この写真では、熟した種子が放射状に並び、まるで黒い星が広がったような姿を見ることができます。一本一本の細い種子には、次の世代へ命をつなぐための工夫が凝縮されています。何気なく服に付いてくる厄介者と思われがちな「ひっつき虫」ですが、その仕組みを観察すると、植物が長い進化の中で獲得した見事な生存戦略に気付かされます。自然観察の際には、ぜひ種子の先端にある小さな「銚」をルーペで観察してみてください。思いのほか精巧な構造に驚かされることでしょう。

(2026年6月中旬／東京都北区)

